

# 十五歳の徴兵検査・戦争へ・海軍航空隊へ

## 田中 芳榮（故人）

### 1 新潟での暮らし

昭和16年（1941年）、私が小学校を卒業して2年目である。

4月に末二叔父が<sup>しゅっせい</sup>出征（注1）して<sup>でんえん</sup>田園仕事

はいよいよ私の<sup>そうけん</sup>双肩（注2）にかかってきた。

父が<sup>じびょう</sup>持病のリューマチで農作業が思うよう

に出来ず、小学校卒業と同時に<sup>でんえん</sup>田園仕事に出る運命にあった。

当時はもちろん農作業は牛を使っでの作業をするわけだが、まだ13歳でもあり、身長も牛の背よりも低く、<sup>ぎゅうしゃ</sup>牛車（注3）を使っでの作業の時など、反対側から見ると、よく牛が1人で歩いていると言って笑われたことを覚えている。

どうにか無事に1カ年の取り入れを済ますことができた。

昭和16年（1941年）に入ると、日増し

田中様の体験談については、田中芳榮様ご本人が生前作成しておりました体験談をもとに、ご遺族の方から投稿があったものを加工して掲載しております。

「自傳 田中 芳榮」原文より直接抜粋

（注1）出征  
軍隊に入って戦地へ行くこと。

（注2）双肩  
重い責任や義務を負うもののたとえ。

（注3）牛車  
牛に引かせる車。

に日本対米英（注4）の關係が險惡けんあくになっていく  
のが、新聞、ラジオ、等でよくわかった。

（注4）米英  
アメリカ。イギリス。

そしてついに12月8日朝、臨時りんじニュースで  
対米英と戦鬪せんとう状態じょうたいに入ったことを知らされ、  
続いて勇ましい軍艦ぐんかんマーチの演奏えんそうのもとに  
真珠湾しんじゆわんの大戦果だいせんか（注5）を始め、各方面せんかの戦果が  
続々ぞくぞくと報道ほうどうされ、一億国民いちおくを熱狂ねっきようさせた。

（注5）戦果  
戦争や戦鬪の成果。

しかし、米英を相手に戦たたかっても、我にあら  
ず、戦たたかうべからずと言い続けた海軍の上層部じょうそうぶ  
の人達は皆、一様にやがて米べい国が強大な国力で  
復元ふくげんして太平洋たいへいようを大津波おおつなみのように押し寄せて  
くること間違まちがいなしと覚悟かくごしていたようであ  
る。

私もすでに2年前から生活物資ぶっしの不足が目立  
ち始めており、すべての物が代用品で賄まかなわれ  
ている中、強きょう大な米べい国を相手の戦争に本当に  
大丈夫いちまつなのかなと一抹の不安は確かに持っ  
ていたが、勿論もちろん当時は言論げんろんの封鎖ふうさもあり、友達  
同士でも話せることではなかったし、子供の頃  
からの教育が、すでに我が国日本国は神国であ

り、何はなくとも大和魂（注6）を持って事に  
あたれば敗れる事などあり得ないと教え込まれ  
ていたのである。

昭和18年（1943年）4月18日、日本

海軍連合艦隊司令長官として太平洋戦争の

総指揮をとった山本五十六長官がブーゲンビル

諸島の最前線を僅か6機の零戦（注7）を護衛

につけ、視察に行く途中、アメリカ軍の戦闘機

F38 30機の待ち伏せに遭遇し、敵機の

機銃掃射（注8）により、機上で戦死された。

この山本長官の戦死の報道がされた頃より

急に戦況は予断を許さない状況であると国民

にも解ってきたようだった。

## 2 徴兵検査（注9）

私もようやく百姓仕事が一前出来る

ようになり、自信も出てきた頃であったが、昭

和18年（1943年）の秋の取り入れが終わ

った頃、適齢年15歳以上20歳までに達した

人は全員海軍を志願することとなり、身体検査

（注6）大和魂

〔近世以降の国粋思想の中で用  
いられた語〕 日本民族固有の精  
神。日本人としての意識。

（注7）零戦

旧海軍の「零式艦上戦闘機」の  
通称。太平洋戦争直前に完成。航  
続距離が長く、軽快で運動性に富  
み、当時の世界水準を抜いた単座  
の高性能戦闘機であった。

（注8）機銃掃射

機関銃で敵をなぎはらうように  
射撃すること。

（注9）徴兵検査

旧兵役法で、徴兵適齢者に対し  
て兵役に服する資格の有無を身  
体・身上にわたり検査したこと。

がくりよくしけん  
と学力試験が行なわれた。

私も、15歳と8ヶ月で受験資格があり、  
身体検査で最低の規定すれすれの、身長151  
cm、体重48kg 肺活量 限度いっぱい  
で何とか合格。年齢も一番下の方で、体格検査  
も最低の状態さいようつうちで、採用通知など私のところへは  
来るはずはないと思い込んで、藁仕事に精を出  
していたところ、合格した170名~180名  
中、私を含む6名に第1番さいようつうちに採用通知が来た。

この6名の内、池内久雄と渡辺幹郎と私が  
せいびへい  
整備兵として共に8月15日第2鹿屋海軍  
こうくうたい  
航空隊（鹿児島県鹿屋市）に入隊すべしであっ  
た。

### 3 海軍航空隊こうくうたい

昭和19年（1944年）8月14日、鹿屋  
駅手前の高山駅に着く。そこで8月15日の入  
隊式前に行なわれた身体検査で痛撃に感じ、今  
でも忘れられないことがある。

えいせいへい げんどう  
その時の衛生兵の言動である。

えいせいへい しんたいけんさ  
衛生兵は、身体検査をしながら、「君達は何

で海軍なんかしがんに志願してまで、入ってきたの  
か！」と言う。

まだ、まるっきししゃばっけ娑婆気(注10)の抜けてい  
ない新人兵の誰かがふんぜん憤然(注11)として、「米英べいえい  
撃滅(注12)のために来ました！」と当時の決

まり文句を言うと、言下(注13)にごんか「馬鹿ばかモン、  
アメリカと戦争をして勝てる訳がないぞ。

たいへいよう ふた  
太平洋に蓋をしたように攻めて来ているぞ！

そんなことでもわか解らんのか。娑婆しゃばにいる時、何  
を教えられていたんだ！」である。

「いよいよ大変なところに入ったぞ」の感が  
する。

それにしても、海軍はなんとあけっぴろげに  
物を言うところか。「娑婆しゃばにいる時は、それこそ  
戦争が不利など、友達同士でも話せないこと  
を！」である。

海軍での生活が始まると、先ずめんく面食らう  
(注14)のが日常用語の中に英語の単語の沢山あ  
ることだった。

(注10) 娑婆

(軍隊・刑務所内や遊郭など)  
自由が束縛されている世界に対し  
て、その外の束縛のない自由な世  
界。

(注11) 憤然

怒るさま。いきどおるさま。

(注12) 撃滅

攻撃して滅ぼすこと。

(注13) 言下

言い終わるか終わらないかの  
時。言い終わるとすぐ。

(注14) 面食らう

突然の出来事にまごつく。驚い  
てあわてる。

いきなり、チンケース(注15)。マッチ(注16)。  
オスタップ(注17)。バス(風呂)等々がポンポン  
教班長の口から出るのには、やはり少なから  
ず<sup>めんく</sup>面食らった。

それと事あるごとに教班長の口から<sup>しゃば</sup>娑婆、  
<sup>しゃば</sup>娑婆という言葉を知ると、自分の今までの生活  
とは全く<sup>かくり</sup>隔離(注18)された世界へ入ったような  
気持ちになり、加えて日常の<sup>くんれん きび</sup>訓練の厳しさで、  
いきなり<sup>じごく</sup>地獄へ投げ込まれたような気持ちにな  
る。

<sup>くんれん げんかん</sup>訓練は、<sup>げんかん</sup>厳寒(注19)の冬は5cm以上の  
<sup>しもばしら け</sup>霜柱を<sup>はだか か</sup>蹴って上半身裸での駆け足。朝の総員  
起こしから夜の<sup>しゅうしん</sup>就寝まで、歩くことは<sup>げんきん</sup>厳禁で  
移動は<sup>か ばんしゅう そうしゅん</sup>すべて<sup>か</sup>駆け足。晩秋から早春まで、1  
回も火を見ることなく過ごす。

<sup>きび</sup>厳しかった5ヶ月半の<sup>がくしゅう とうそうしん</sup>学修と闘争心と  
<sup>しんしんたんれん くんれん</sup>心身鍛練の<sup>せいさい つい</sup>訓練と加えて数々の<sup>せいさい つい</sup>制裁で遂に  
<sup>ぎせいしゃ</sup>2名の犠牲者が<sup>つや</sup>出て、2回お通夜をし、2名の  
<sup>ぜんちふのう</sup>全治不能が海軍病院へ入院していった。

その後、勤務先が発表され、<sup>こうげき</sup>攻撃第一飛行隊、

(注15) チンケース  
真水や油の缶を半分に切って持ち手をつけたもの。バケツがわりに用いられた。

(注16) マッチ  
雑巾のこと。古い信号旗などをほどいてつくられた。

(注17) オスタップ  
たらいのこと。

(注18) 隔離  
他のものから引き離して別にする事。

(注19) 厳寒  
きびしい寒さ。極寒。

ぶたい  
部隊は香取航空隊（千葉県旭市）と告げられる。

丸一日後に香取の航空隊に到着するも、本  
体はすでに茨城県の百里原の飛行場へ基地移  
動をしているとのことで、翌日また百里原基地  
（茨城県小美玉市）へ向かって移動する。

#### 4 海軍航空隊での日々

ぶたい にんむ こうりやく ここ  
部隊の任務は、サイパンを攻略し、此处を  
こんきょ いおうじま しんげき けいひん  
根拠にして硫黄島に進撃し、東京、横浜（京浜  
地区）へ真正面から攻撃してくる敵機動部隊  
（注20）を迎撃する重大任務を有する部隊と  
聞く。

ぶたい  
部隊では、第二御楯隊、第三御楯隊が出た後  
いおうじま はいかい てききどうぶたい  
も硫黄島周辺に徘徊する敵機動部隊に対し、少  
数さながら特攻隊（注21）を繰り出していたが、  
おきなわ  
やがて沖縄方面へ集中的に押し寄せてくるよ  
うになり、沖縄作戦が始まると、彗星艦爆が大  
ちゅうけい おきなわ  
量に鹿屋基地や国分基地を中継して沖縄へ  
とっこうこうげき しゅつげき  
特攻攻撃に出撃して行く。

しゅつげき せいび ほうさつ  
出撃前になると、2日も3日も整備に忙殺

##### （注20）機動部隊

機動力の優れた部隊。海戦では空母を中心に、巡洋艦・駆逐艦などで編制された航空戦を主任務とする高速艦隊をいう。

##### （注21）特攻隊

第二次大戦中、爆弾を積んだ飛行機などで敵艦に体当たり攻撃を行なった部隊。

へいしや  
され、兵舎に帰るのは食事の時だけで、夜も機  
の周辺で仮眠をとる。

とっこうきしゅつげき かっそう ろ わき  
特攻機出撃の時は手空き全員、滑走路脇の  
見送り位置につくが、各機に機体整備の1名と  
自分達の兵器員が1名最後まで残り、搭乗員  
がエンジンの調子を確認し、「これでよし！

はっしん  
発進！」となると、手先信号で指をくるくる回  
す。

せん はず あいす  
兵器員に対して「安全栓を外せ」の合図であ  
る。

エンジンはスロー回転でも機の下は風速60  
メートルとも言われる中、地を這うようにして  
ばくだんとう しんかん せん はず とうじょう  
爆弾頭の信管(注22)から安全栓を外し搭乗  
員に渡す。

とうじょう  
その時、搭乗員の顔が真っ白だったのが今  
でも強く印象に残っている。

はず はず きたいせいび  
続いて「外せ、外せ」の手先信号で機体整備  
の人が前輪止め(チョク)を外すと、機はゆっ  
ゆうどうろ  
くりと誘導路から、やがて全員見送りの位置に  
ついて滑走路に出て、スロットルレバーを

(注22) 信管  
弾丸の装薬や爆薬を爆発させる  
ための起爆装置。



全開にするも80番爆弾搭載の時などは倍も

加速してやっと離陸していく。

1機、2機と離陸して全機飛び立つと、上空

でがっちりと編隊を組んで飛行場を1周し、

最後の別れをして雲の彼方へ消えて行く。

## 5 敵機襲来

昭和20年（1945年）4月以降になると、

B29の編隊と、これを護衛する戦闘機の戦爆

連合の敵機襲来が度重なってくる。

それを地上から撃つ機銃陣地内に班長と2

人1組で入っていると、上空に15機ほどの

編隊が見える。またグラマン（注23）である。

飛行場の向こう端を右から左の方向へ飛行して

いたが、丁度機銃陣地の正面まで来ると、急に

1機又1機と左旋回すると同時に急降下

（注24）で突っ込んできた。

次から次へと全機が機銃陣地を目掛けて突

っ込んでくる。

私が射手となり、班長がベルト弾の介添え役

（注23）グラマン

アメリカの航空機会社グラマン社が製造したアメリカ海軍の艦上戦闘機。第二次大戦中の海軍主力戦闘機。

（注24）急降下

飛行機が機首を地面に向けて垂直に近い急角度で降下すること。

となる。

グラマンが降下こうかを始めると、班長うが「撃うて！撃うて！」と叫ぶが、まだ機影きえいが小さく、撃うっても当たるものではない。

まだまだと言っている内にグラマンの方から撃うち始めた。

これを合図あいずのようにして地上からの対空たいくう射撃しゃげきとグラマンの機銃掃射きじゅうそうしゃが一斉いっせいに始まり、  
あたり一面あた いちめん修羅場しゅらばとなる。

私の方へ向っている機をよく見ると、少しだけ角度が違う。

少しでも角度が違えば、機銃掃射きじゅうそうしゃの弾たまは当たらない。

これは、射爆兵器員せんもんちしきとしての専門知識である。

まずは、安心して自分の狙ねらったった機を撃ち続ける。……と班長が服を引っ張って「入れ！入れ！」と合図あいずする。

すぐ脇わきに2人だけ入れる防空壕ぼうくうごう（注25）がある。

（注25）防空壕  
空襲から身を守るため、地面を掘って作る待避所。

また、「危険だから入れ！」と合図<sup>あいず</sup>する。

その為かベルト弾の介添え<sup>かいそえ</sup>の手元<sup>てもと</sup>が狂ったの  
か、弾が斜め<sup>なな</sup>に入る通称<sup>つうしょう</sup>（突っ込み<sup>げんしょう</sup>）の現象  
を起こして機銃弾<sup>きじゅうだん</sup>が出なくなり、私も防空壕<sup>ぼうくうごう</sup>  
へ飛び込む。

見ると後続のグラマンが地上30mほどの所  
まで突っ込み終わって水平飛行に移っている。

パイロットの顔もハッキリ見える。

「撃ちたい<sup>う</sup>」と思って出ようとしたが、班長  
が私を押さえて離さない。その時、「バァーン」

と大音響<sup>だいおんきょう</sup>がして辺り一面破片<sup>あた いちめんはへん</sup>のはじける音  
がした。空中炸裂弾<sup>くうちゅうさくれつだん</sup>である。班長の押さえる  
のを聞かずにいたら、当然無事という訳にはい  
かなかったであろう。

## 6 玉音放送<sup>ぎよくおん</sup>（注26）そして終戦

昭和20年（1945年）8月15日早朝よ  
り不気味なほど、静かな日だなあと思っていた  
が、誰からともなく、口伝えに正午に重大ニ  
ュースがある<sup>みな</sup>ので、皆聞くようにとのことである。

（注26）玉音放送

1945年（昭和20）8月15日、昭和天皇みずからの声でラジオを通じて全国民に戦争終結の詔書を放送したこと。日本国民ははじめて天皇の肉声に接した。

私は通信室の前へ行く。電信員がラジオを

やがい  
野外へ出してボリュームを上げる。

ポツダム宣言（注27）の受諾じゆたく ぎよくおんの玉音放送を  
聞く。不思議かんがい わと何の感慨も湧かない。ただ、「終  
わったか！」とそれだけの気持ちだったような  
記憶きおくがある。

それから1週間程、兵器せいりの整理をして、一ヶ  
所しゅうのうに収納、引き渡しの準備も完了した頃、一  
部の士官かいたいを残して解隊となり、司令の最後の  
訓示くんじがある。

「隊は解消しても家につくまでは軍規は守る  
こと。家についたら、とにかく食うために  
いっしょうけんめい 一生懸命働いてくれ。それから日本海軍に  
在籍ざいせきしたことは生涯しょうがい忘れないで欲しい。」との  
訓話くんわは今でも覚えている。

かくして、昭和20年（1945年）8月2  
5日、前年の8月11日から数えて満1年と1  
5日じごくの地獄の体験であったわけだが、五体満足ごたいまんぞく  
のまま無事いえじに家路につく。

（注27）ポツダム宣言

1945年7月26日、ポツダム  
において、米・英・中三国の名で  
（のち、ソ連も対日参戦と同時に  
参加）発せられた日本に対する降  
伏勧告および戦後処理方針の宣  
言。日本の軍国主義の除去、軍事  
占領、主権の制限、戦争犯罪人の  
処罰、再軍備禁止などについて規  
定している。日本は8月14日こ  
れを受諾した。